

ratione にとどまるとし、実在的区別 *distinctio realis* の考え方はだいたい旗色が悪いが、実は両者の区別は被造世界に対する神あるいは創造者の絶対的超越性、即ち、被造物と創造物との間の実在的区別 *distinctio realis* 以外にその根拠を見出せないで、またこれなしには *creatio ex nihilo* という創造神学も発出的因果論に墮してしまうのである。さもあらばあれ原始恩寵を告げしらせる創造神学には既に「存在」の超自然的無償性を告げしらせる福音的性格が保証されているのである。

提題

トマス哲学の現代的意義

山 田 晶

トマス哲学は、それ自体としていかに豊かな価値を含んでいようとも、その価値を現代において理解し、現代の哲学的状況のうちに現前せしめる研究者が無いならば、図書館の片隅に空しく埃をかぶっている古書の集積にすぎないであろう。それゆえ私は、トマス哲学の現代的意義という問題を、トマス哲学研究の現代的意義という観点から考えてみたいと思う。それは次の三点にしばられる。

(1) トマスは、教会の内部に若干の熱狂的信奉者を有しているが、しかし現代哲学の全体的見地からみるならば、むしろ無視され、黙殺され、或いはきわめて低く評価されているというのが、いつわらざる現状であろう。しかしながら現代の哲学者たちのトマスについての見解と評価とは、彼ら自身のトマスについての深い研究にもとづくものではなくて、多くの場合、先入見と浅薄な誤解にもとづくものである。他方、熱狂的なトマス主義者たちも、広く深い哲学史的視野の中でこれを正しく理解しているとは限らない。多くの場合その反対であって、彼らの浅薄なトマス論は、却って好もしからぬトマスについての先入見を流布するために役立つのみである。

このような現状において、トマスの著作をあくまでもテキストに即して正確に理解し、また彼の体系のうちに含まれる豊かな哲学的諸概念を、古代から始まりトマスに到る歴史的発展の相において把握し、その成果を現代の学界に現前せしめるこ

と、すなわちトマス哲学に関する広義の歴史的研究は、地味ではあるが、トマスについての一般的偏見を除去してゆくための最も確実な方法であり、それ自体として現代的意義を有する仕事である。

(2)トマス哲学の復興とは、或る人々が考えているように、トマス以後の哲学を悉く虚偽の哲学として否定し去り、いわゆる「純正トミズム」を、全世界の人間が学ぶべき唯一絶対の真理として押しつけることでは決してない。トマス哲学を現代に生かそうと思うならば、われわれはトマス哲学と、彼以後の哲学との間に存する連続の側面と断絶の側面とを明確に把握し、その歴史の意味をよく考えてみなければならない。トマス以後の西洋哲学の歴史は、トマスにおいて一つの調和を保ち一つの連関のもとに理解されていた哲学的諸概念が、統一を失い、分解してその一つ一つが問題的となり、その一つ一つの問題をそれぞれの歴史的状况の中で引き受けた哲学者たちによって、主体的に探究されてゆく歴史である。その探究において彼らより所としたものは、彼ら各自の主体的「経験」である。そしてこれら多くの哲学者たちの経験を通して主体的に把握された哲学的諸概念を総合し、新たなる体系を樹立したのはヘーゲルである。それとともに彼は、彼自身の体系に到る西洋の哲学史全体を見渡す一つの視野を開いた。ヘーゲル以後、哲学史の学は、個々の事実の実証的研究に関しては、ヘーゲルを超えて大きく進歩したが、哲学史全体を見渡す全体的視野に関しては、いぜんとしてヘーゲルの開いた視野のもとに在る。そしてこの視野の中で、中世の哲学、特にトマス哲学は、不当に無視され、黙殺されている。また現代の著名な哲学者たちがトマスについて抱いている無知と偏見とは、彼ら各自のヘーゲル批判にも拘らず、その哲学史的視野に関しては、彼らがいぜんとしてヘーゲルの支配下に在ることを明白に証拠立てる。

トマス以後の西洋哲学の歴史が、トマスによって遂行された哲学的諸概念の総合が解体し、それらの概念の一つ一つが問題的となり、新しい西洋の歴史的状况の中で、各々の哲学者の経験を通して主体的に探究され、主体的概念となり、それが再びヘーゲルによって総合されてゆく過程として綿密に歴史的に研究されてゆくならば、それとともに、ヘーゲルの開いた哲学史の視野そのものを自らのうちに包含するような新しい哲学史的視野が開かれてくるであろう。その視野の中でヘーゲル哲学の正体は（何故彼の哲学史がトマス哲学を不当にも黙殺しなけりなかつた

かという理由をも含めて)あらわにされてくるであろう。このようにして、現在支配的である哲学史の視野を根本から改めて、もう一度、西洋哲学の全体を新たなる視野のもとに見直すこと、これは現代及び将来のトマス哲学研究が果すべき課題に属するであろう。もちろんこの課題を果すためには、ただトマスの著作を読んでいるだけでは足りない。しかし何よりもまず、トマスそのものをよく読まなければならない。そしてトマス哲学における総合を成さしめていた原動力が何であったかを把握しなければならない。

(3)トマス以後、ヘーゲルを通して現代に到る西洋哲学の主要なる性格は《subjectivism》として特徴づけられる。それは或る人々によって《主観主義》と解されるが、当らない。それはむしろ、哲学的諸概念を自らの主体的経験において反省し、検証することによって我々が物にしようとする《主体主義》である。《主体主義》としてのトマス以後の哲学は、また共通的に、自己の主体的経験から出発する《経験論》である。

さて、このような《subjectivism》が現在、批判の対象となり、それからの超越が様々な仕方でも試みられているが、この問題の解決への方向に、トマス哲学を現代(というよりはむしろ来るべき時代に)生かして行くべき道がひらかれていると思われる。しかしそれは、《主体の哲学》に対して、いわゆる《存在の哲学》を安易な仕方でも置き換えることでは決してない。そもそも現在、《subjectivism》が批判されるようになったのは、哲学的概念を単に過去から受け継がれたままに無媒介的に受け取るのではなくて、自己の主体的経験と反省とを通して我が物にしてゆくという《subjectivism》本来の精神のうちに何らかの欠陥が見出されるようになったからでは決してない。却ってこの主体的反省そのものが徹底されて、これまでの《subjectivism》の哲学が「経験」であると考え、その哲学の出発点としたものが、果して真実の経験であったかという反省が、《subjectivism》そのものの内部から生じてきたからに外ならない。これに対しトマス哲学は、それはたとえわれわれの経験の部分ではあるにしても、われわれの現実に経験する「全経験」ではなかった、と明確に答えるであろう。では、われわれの現実に経験する「全経験」とはいかなる経験であるかという問いに対しては、それは「全存在」totum esse の経験であると、明確に答えるであろう。「全存在」の経験が主体的経験論の出発点となるとき

《subjectivism》からの超越の道は、自ら開かれるであろう。なぜならば、われわれの「全存在」は孤立して存在するものではありえず、まさに存在的に存在に向けて開かれて在るものだからである（このことは勿論、精密な論証を必要とする。）したがって、存在に対して開かれて存在することの経験、すなわち超越の経験は、まさにわれわれの「全存在」の経験のうちに含まれているのである。このような「全存在」の経験を分析し、その自覚の過程を追求してゆくことは、「来るべき哲学」の主要なる課題となるであろう。そしてこの課題の達成のために、トマスの著作、特に『真理論』は無限に豊かな内容をわれわれに開示するであろう。

提題

トマス倫理学の現代的意義

稲垣良典

(1) ここで「トマス倫理学の現代的意義」という言葉は、現代における倫理的探究にたいするトマス倫理学の影響あるいは寄与、という意味に解する。

この場合、まず頭にうかぶのはトマスの自然法論（そこにふくまれている人間存在の歴史性への顧慮、経験的な探求の重視、などに注意）であるが、それは比較的良好に知られていることなので、立入って論ずることはひかえる。むしろ以下においては、トマス倫理学が現代において持つべき意義、つまり、それを現実化することがトマス研究者にとっての課題であるような「現代的意義」に目をむけたい。それはトマス倫理学におけるメタ倫理学、あるいは「道徳の形而上学」の側面の研究である。

(2) 現代のメタ倫理学の中心問題は、善（もしくは正）と呼ばれる倫理的価値を客観的に基礎づけることが可能か、可能であるとすればいかにしてか、というものである。この問題をめぐって、自然主義倫理学と分析的倫理学とが鋭く対立しているが、その対立は極めて限定された場面におけるものであって、トマス倫理学は上の問題の探究がより広い場面で行われうるものであり、また行うべきものであることを示すことによって、この対立を止揚しうるのではないか、というのが本稿の論